



2026年は一般社団法人日本記念日協会が認定した千年に1度の「お風呂(〇26)の年」。自家風呂の普及で、昔ながらの銭湯(一般公衆浴場)は姿を消しつつあり、県に届け出がある一般公衆浴場は残り7

軒となった。そのうち県公衆浴場業生活衛生同業組合に加盟する3軒は世代交代を進め、交流サイト(SNS)の活用やスケートボード場の開設など若者を意識した試みで客層拡大を図り、日本の伝統文化を守っている。
(平山紗也華)

2026年は「お風呂の年」

県内3軒、進む世代交代

銭湯文化若い力で守る



295

小学校高学年向け 年組



宝湯を切り盛りする稲垣さん(左)、茂子さん(右) 夫妻と孫の片岡さん
112025年12月、宇都宮市若草1丁目

SNSやスケボーも活用

「ゆ」と書かれたのれんをくぐると、客のにぎやかな声が響く。宇都宮市若草1丁目の「宝湯」は1983年創業。同組合の理事長でもある稲垣佐一さん(76)と妻茂子さん(72)が切り盛りする。地域の保健衛生に必要とされ、料金が統制される一般公衆浴場。稲垣さんによると、ピーク時は県内に約140軒あったが、自家風呂の普及、経営者の高齢化、施設の老朽化、スーパー銭湯などの公衆浴場との競合で減少し続けている。

宝湯も後継者に悩んでいたが昨夏、孫の片岡佑斗さん(23)が「祖父母が続けてきた憩いの場所がなくなると寂しい」と働き始めた。湯船の掃除や準備、番台業務を一から学ぶ日々。「大変だが、感謝されるとやりがいを感じる」と片岡さん。稲垣さんは孫の成長

を温かく見守っている。小山市城山町2丁目の「幸の湯」の3代目星良則さん(66)はSNSへ営業情報と写真を投稿するのが日課だ。「いいお湯を沸かしているの、入ってもらわないともったいない」後を継いだのは、先代の父良行さんが他界した5年前だった。会社勤めを続けるか迷ったが「銭湯経営に代わりはない」と決意し、浴場の設備工事を担う「釜屋」に機械の使い方を教わった。現在は妻素子さん(64)と二人三脚で新規顧客開拓に力を入れている。

浴槽から金魚が見られることから「金魚湯」の通称で知られる栃木市室町の「玉川の湯」。22歳で業界に飛び込んだ4代目木崎樹さん(47)は、学生時代に親しんだスケボーで客層を広げてきた。働き始めて数年後、同世代を取り込むため敷地に左右がせり上がる「ランプ」を手作りした。先代に反対され、勝手に壊されたことも。だが仲間がスケボー後

に入浴するようになり、常連客と仲を深めていった。代替わり後、2階の休憩所などを改装しスケボー場を作った。共存を受け入れてくれた銭湯の客に感謝し「地域に恥じない銭湯を続けていきたい」。今日もま

関係があるのでしょうか。

【7】公衆浴場の良さは何でしょうか。家族と話してみましょう。

設問

【1】見出しを四つ書き抜きましょう。

【2】銭湯とは何でしょうか。また「お風呂の年」とは何でしょうか。本文から読み取りましょう。

【3】県内の銭湯のピーク時の軒数と現在の軒数を、本文から調べましょう。

【4】なぜここまで銭湯が減ってしまったのでしょうか。理由を四つ挙げましょう。

【5】銭湯と交流サイト(SNS)にはどんな関係があるのでしょうか。

【6】銭湯とスケボーはどんな